

翔べ！
世界へ

コーネル大学での 東南アジア研究の2年間

コーネル大学 東南アジア研究プログラム

私が所属したのは歴史学部の博士課程であったが、コーネルでの人間関係を決定的に規定したのは、東南アジア研究プログラムの一員としてのアイデンティティーであった。同プログラムは独立した学部ではないものの、独自のオフィスや財源を持ち、東南アジア地域研究に携わる教員や学生が、個々の所属学部の壁を越えて参加していた。

水曜日の昼にはゲストスピーカーを招いてのランチョン・ミーティング、またしばしばプログラム主催の映画会などが開催された。毎週末に指導教授を含めてキャンパス脇のレストランにワイワイ集まるビール会合、あるいは学生同士のホームパーティーなどなども、そのほとんどすべてがプログラムメンバー同士の集まりであった。期末ペーパーの英語添削を快く引き受けてくれるのも、あるいは困

った時にあれこれ助け舟を出してくれるのも、プログラムに属する仲間の大学院生たちであった。

私のベトナム研究の原点

同プログラムに参集する教員、スタッフ、学生たちは米国人のみではなく、東南アジア各国を含むさまざまな国籍を持つ人々から構成されていた。それぞれの母国訛りの英語が日常的に飛び交い、それにタイ語やインドネシア語などが混じり合うコスモポリタンなコミュニティであった。

私がコーネルに滞在したのはベトナム戦争終結直後のことであって、米国社会は「ベトナム戦争シンドローム」に病み、また国務省や各財団からの東南アジア研究に対する財政的支援も先細りになりつつあったが、このコミュニティには、東南アジア研究を志す人々の同志的連帯感と熱気が満ちあふれていた。

南ベトナムでの政変によって、サイゴンでの生活を突如中断され

た私にとって、コーネル大学での二年余の期間は、東南アジア世界への渴望を癒す上でも、大きな意味を持った。ベトナム研究者としての私の原点は、七〇年代における南ベトナム滞在与コーネル大学留学によって形作られたといつてよい。

経団連が事務局を務めている各種奨学金運営団体の活動により、毎年高校生から大学院生までの多様な奨学生が留學し、今日、その経験を活かして内外のさまざまな分野で活躍している。本コーナーは、留學先での経験と現在の活動の模様を紹介することにより、これら奨学生を送り出してきた奨学金運営団体への一層の理解促進と、支え、協力してくれた企業への活動報告とするものである。

国際文化教育交流財団は、経団連第二代会長 故石坂泰三氏の遺徳を記念し、一九七六年に設立された。これまでに、世界二十八カ国の大学・大学院へ一四一名の日本人留學生を派遣するとともに、世界三五カ国三八八名の外国人留學生への奨学金の供与や文化教育面での事業運営を実施してきている。

お問い合わせ・連絡先
経団連社会本部 人材育成グループ

白石昌也

しらいし まさや

早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授

国際文化教育交流財団第1回生(1976年度)。

71年東京大学卒業。76～78年米国コーネル大学留学。79年東京大学大学院博士課程修了、博士(学術)。大阪外国語大学助教授、バリ大学客員研究員、横浜市立大学教授を経て、99年より現職。



最近の筆者(左端)。ハイフォンにてベトナムの友人たちと

サイゴンから米国イサカへ

一九七五年四月、今から二十年以上前のことである。南ベトナムに滞在していた私は、陥落直前のサイゴンから帰国して、東大の博士課程に復学した。しかし、そのまま日本で勉学を続けることに、ある種の行き詰まりを感じていた私は、恩師たちからの強い勧めも

あつて、米国への留学を真剣に考え始めた。そのような時、経団連が新たに奨学金制度を創設したことを知って応募したところ、幸運にも第一回の奨学生の一人に選ばれた。

七六年七月羽田空港を飛び立ち、途中ロスアンジェルスなどで、難民として米国に脱出していたベトナム時代の友人たちと感激の再会を果たした後、ニューヨークからローカル航空に乗り継いでイサカに向かった。

留学当初の苦勞

コーネル大学のあるニューヨーク州イサカは、フィンガーレークという氷河湖のほとりに位置する風光明媚な町である。大学自体も全米随一といわれるほどの美しいキャンパスを持つ。

ただし、夏の陽光の中で何もかもが輝いて見えたのは束の間のことと、新学年の開始間もない十月頃からは、うんざりとするほどの豪雪の中に閉じ込められる生活が

始まった。雪解けは翌年の五月である。

さらに、大学でのコースワークも当初は苦痛の連続であった。ともかくも、英語能力で歯が立たない。授業で活発に質問したり討論に加わったりする米国人学生に比べて、自分がひどく劣っているように感じられ、いいようなない焦燥感と絶望感にさいなまれた。おまけに、授業ごとに指定される必読文献は膨大である。

放課後には、他の学生から講義ノートを借用して自分のノートの欠落を補い、さらに次の授業の予習のために、深夜十二時の閉館ギリギリまで図書館にこもる生活が続いた。

十一月の感謝祭や年末のクリスマス休暇がなければ、極度の緊張と重圧の中で私の留学生活はパンクしていたかも知れない。しかし、翌年のイースター休暇や五月の学年末の頃になると、新たな環境にも慣れ、英語力も知らずしらず身につについて、留学生生活をエンジョイする余裕が生じた。